

# ファンタジーとしての「竹取物語」をまるごと読む

—— 定時制一年生の教室で ——

片桐 啓 恵

## 1. 制約の多い教室で、古典を教材とする理由

私は今、定時制高校でことばの学習に携わっている。時間数の少なさ、家庭学習は望めないこと、学習者個々の能力差など、多くの条件のために、まずは生きていくための現代日本語の確実な修得と活用力をつけることが必須かつ急務であって、勢い「国語」の学習は現代文教材中心にならざるを得ない。ハッキリ言って、古典までなかなか手がまわらない。それでも、なんとか時間を割いて古典教材をやりたいと思う。指導要領に決められているからでもなく、教科書に載っているからでもない。古典を読むおもしろさを分かち合いたいからだ。

私自身が古典を読むという体験を通じて感じている次のことを、生徒達にも感じてもらいたい。

(1) 古典を通して、ことばの世界をより豊かに広げることができ。

(2) 人間の想像力・表現力の可能性を、時間・空間のつな

がりの中で味わうことができる。

(3) 人間の生き方の不易流行を考えることができる。

同時代を見据え、その課題を生き抜くことが問われる以上、現代文教材の価値が大きいのは言うまでもないが、現代文教材だけでは見通せないものを与えてくれるのが古典教材であろう。

過去を学ぶことで、人間は現在を直視し、未来への視点を定める。歴史学習における資料の読みと異なり、ことばの学習における古典の読みは、時代の中で生きた生身の人間の姿と心を、ことばの表現の営みを通して読み取ることにある。それを、古典を読む楽しさを体験として知ること、自然に学習していつてほしいと思っている。

## 2. “まるごと読む”ことの意味

古典に限らず、すべての教材、特に物語性のあるものは、細切れにされると生命を失う。教室に持ち込む以上、時間的

な制約などのために一部を切り取るにしても、ある程度のまとまりがどうしても必要である。

殊に入門期の教材を選ぶなら、少し長くても、物語のおもしろさでぐいぐい引き込まれるものがよい。

その点、「竹取物語」は申し分ない。

- (1) 「竹取物語」には物語の要素がいっぱい詰まっている。
- (2) 物語りは伏線を読むことにおもしろさがある。
- (3) 人物造形のおもしろさを、再表現に生かすことができる。

- (4) 自分が知っている「かぐや姫」の話との比較読みができる。

教科書の「竹取物語」は「かぐや姫の誕生」「月を見て嘆くかぐや姫」「かぐや姫の昇天」程度しか載っていない。これでは「竹取物語」の本当の魅力は味わいようがない。私は「竹取物語」を「物語の祖」の意味を引き出しながら読んでいきたかった。スケールの大きなファンタジーとしてそのまま現代に通じる価値を引き出しながら読んでいきたかった。『まるごと読んでこそ、それが可能になる。細切りのものをいくつも読んで、結局何も記憶に残らない。そんなことはしたくない。少ない授業時間を有効に使おうと思えばこそ、一つの教材にじっくり時間をかけて、そこから多くのものを学べる学習、それを通してさまざまなことばの力が育つ学習をしたいのである。

### 3. 古典と現代文教材をつなぐ視点

古典を読むことを現代を生きることに生かす方法として、古典そのものに人間の普遍性を追求していく読みと、古典・現代文を組み合わせて読むことで読み比べ、読み深めていくやり方がある。今回の単元では前者を採った。しかし、一年次から二年次へと積み上げていく見通しの中で、「絵本オリエンテーリング」「青春のファンタジー・ワールド」と現代文教材（外国文学を含む）の単元につないでいく布石でもある。

「竹取物語」のファンタジー性を十分に読み深めておくことで、人間の本质に迫る手法としての虚構、寓意をよむ力をつけ、それをバネとして、絵本（数一〇冊）、ファンタジーへと、読書生活指導まで取り組みたいという計画の一環である。

また、学習方法としては、古語という壁を乗り越えることが加わる外は、現代文を読み込んでいく方法と基本的に変わらない。材料としては古典を扱っていても、そこでつけている力は、現代文を読むときに応用していける力である。

#### 4. 単元「日本最古の空想小説を読もう」

##### ■学習者の実態

定時制普通科一年、二クラス。各二十人ずつでスタートしたが、この単元に入る二学期には、既に二〜三人ずつが退学し、常時出席するのは七〜八人ずつという状況だった。一年生は例年出席率が悪いが、この学年は特にひどかった。一学期は授業が始まって教室に入らずウロついたり、私語がひどかったり、落ち着かない状況が続いていた。個々の能力差も大きい。ことばの学習に関しては、一学期に学習ノート（プリント）記入による個別学習に慣れる段階を踏んでいるので、ある程度集中して学習できる者が増えてきている状態。女子三人は大変能力が高い。一人は三〇代（二人の子供のお母さん）、二人はそれぞれ中学時代「不登校」でほとんど学校にいない。四人の男子が極端に力が弱い。そのうち二人はひらがながスラスラ書けない。そのうち一人は単純に書き写すことは集中できるようになったが、もう一人は全く学習に集中できない。別の一人は、気が向けば思考力が必要な作業にもこちらのヒントに乗って取り組んでいく。残りの一人は、首を縦横に振る以外ことばでは反応しない子で、入試のとき中学の先生が「何もできないと思いますが、何とかよろしく」といって付き添ってくるぐらいだったが、一学期の間に文章の内容を理解する力があることが分かった。短いまとまりの文章なら、

問いにに応じて答えに相当する部分をそのまま抜き出すことはできる。ただし、字を書くのに大変な時間がかかる。また、時々促さないと、ネジの切れたおもちやのように動きが止まってしまふ。

##### ■単元のねらい

- ・自分が知っていた「かぐや姫」の話と「竹取物語」を比較し、原作の創造性・構築力などについて発見する。
- ・登場人物の個性を読み取り、心理を考えたり、その人物の戯画化によって風刺されているものを考える。
- ・空想小説として現代に通じる発想、イメージの新鮮さ、おもしろさを見つめる。
- ・ファンタジーとして読み取ることのできるさまざまなテーマ（幸福の本質、生命、家族、身分と階級、結婚観、宇宙人の存在、天上界と地上…）を取り出し、それに沿って読み深める。

##### ■この学習で育てることばの力

- ・説明（現代語訳、解釈を含む）を聞き取って、ノートに書き取る力。
- ・学習ノート（プリント）を保存・整理していく力。
- ・物語の展開、人物などを理解して、問いに沿ってまとめる力。
- ・時代背景、生活習慣などに関する説明から得た知識を

基に、物語の事柄の背景を考える力。

・物語全体の筋を簡潔にまとめる力。

・物語から読み取ったテーマなどについて自分のことばで表現する力。

・ある登場人物の視点から物語を再現する力。

視点転換による論理的書き換え

想像性

描写力

人間洞察

## ■単元の展開

国語 I 四単位

〔1次〕二学期(約三十時間)

〔2次〕三学期(約十時間)

〔1次〕私を知っている「かぐや姫」

「竹取物語」全文を読む

かぐや姫の生い立ち

五人の求婚者

石作皇子と仏の御石の鉢

くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝★

阿倍の右大臣と火鼠の皮衣★

大伴の大納言と龍の顎の玉★

石上の中納言と燕の子安貝★

かぐや姫と帝☆

かぐや姫、月を見て嘆く

帝、かぐや姫の昇天を防ごうと兵を出す★

かぐや姫の昇天

残された人々

★はあらすじのみ

☆は現代語訳で

〔2次〕A. 「竹取物語」全体の筋のまとめ

B. ある登場人物の視点から見た竹取物語

(視点転換による再表現)

C. 「竹取物語」原文を読んで

〔1次〕では、一斉学習で教師の説明を聞いてノートを取ったり、発問に対して一緒に考えたりする活動を中心に

進めた。このような方法は定時制の私の教室では珍しい。

一人一人を確実に学習に参加させるには、一斉学習は向かないからである。しかし、古典を教材とする場合、どうしても教師が説明しなければならぬことがある。説明を聞くという力がなければ、古典の学習は成り立たない。そこで、一学期につけたノート記入の力と集中力の上に立って、ここでは説明を聞き取って書き留めるといふ力を徹底的に訓練しようと考えた。

かなりの量の文章（プリント四十枚）を読んでいくので、見出し毎のまとまりで区切って内容を整理したり、読み深めるための問題を設けた。この部分は個別学習としたので、一斉学習の一区切り毎に個別学習で整理していくという組み合わせの形態とした。また、出席が安定しないので、早く進む者には問いに進ませて、その間に欠席の多かった者には元に戻って説明を繰り返すということをししばしばしなければならなかった。

「竹取物語」をまるごと読むとは言え、完全に全部を原文で読んでいくのはさすがに分量的に無理があるように思えた。同じことの繰り返しでは生徒に飽きもくる。そこで一部をあらすじと現代語訳で済ますことにした。ただし、その部分も読み取りの問題の対象とした。

「2次」のB.が「まるごと読む」というねらいの中心となる活動である。

「まるごと読む」というのには二つの意味がある。一つは「物語全体を読み味わう」という意味。もう一つは「読んだ物語を自分の中に取り込んで消化する」という意味。後者の活動として「再表現」を位置づける。

「再表現」とは、創作ではない。既に作品として表現されているものを自分の中をくぐらせて、元の作品の力に依拠しながら、自分のことばを加えて表現する活動である。

ここでは「竹取物語」の登場人物の中から一人を選び、その人物の視点で独白体で物語全体を書いてみるという方

法を使った。この方法によって、その人物に思い入れし、人間のドラマとして作品全体をとらえることになる。学習者個々の理解度、感性、論理性、表現力が如実に出てくる。この学習は高度だが、元となる作品があるので、生徒はそれに沿いながら書いていくことができ、意外と遊びの感覚のできる面もある。もちろん、私の教室では、どうしてもこの作業はできない生徒が数名いる。彼らには、C.の活動ができればよいとした。C.は、学習のまとめ、感想に当たるが、四つの項目を設けて、そのなかのいくつかに答える形で書いていけるようにした。A.は、B.をやりやすくするための準備作業である。

（長崎市立長崎高等学校）

## 「竹取物語」原文を読んで

■次のような点について、述べなさい。

1. 自分が知っていた「かぐや姫」の話と「竹取物語」原文全体を比べて、どのような点が同じで、どのような点が違っていましたか。
2. 「竹取物語」の中で印象に残っている人物・場面をとりあげ、なぜ印象に残っているのか述べなさい。約千年も前に書かれた物語としては、今でも新鮮に思えるアイデアや空想場面がいろいろあります。空想小説として面白いと思える点をいくつかあげなさい。
4. 「竹取物語」の作者はわかっていますが、この物語の中には、様々なテーマがかくされています。人間の幸福、生命、家族、身分と階級、結婚観、宇宙人、天上界と地上……、これらの中からどれかを取りあげて、作者のメッセージや自分が考えたことなどを述べてみよう。

### △資料① 生徒のプリント▽

小さい頃からわりと聞いていた「かぐや姫」の話は、ただ漠然とかぐや姫が竹の中から出てきて、月に帰っていったという印象というか、さして、かぐや姫の気持ちがどうのこうのと、考えた事はありませんでした。かえって、美

しく月に却って行くかぐや姫はかっこいいとかそういう羨望の方が多かったような気がします。しかし、原文を見てみると、かぐや姫の成人の儀式の裏にある大人の世界や、かぐや姫の意外な性格、またその時代の風習など新鮮な面や、学ぶ面もありました。それに、極めつけは宇宙人の登場でしょう。今でもなぞとされている宇宙。千年も前にしてその事を小説にしまい、今なお、これだけ現代的だと見てしまうのはそのせいでもあるのでしょうか。それから「翁—かぐや姫—帝」このかぐや姫をとり囲む人間関係でも何やら身近なものを感じました。おじいさんが結婚しろといつても頑固に断り続けたかぐや姫の気持ち。帝にこっそりあわせろといわれ、結局承諾してしまったおじいさんのたてまえ。帝の気高くも純粋な愛情。そして、かぐや姫が帰るときの、三人の悲しみ。とても、人間くさくて、そんな所が親しみやすくてよかったです。

最後に、不死の薬を捨ててしまった翁と帝。長く生きるのではなく、どう生きるのかが大切なことだと教えてもらった様な気がします。私も、長く生きて、人の死んでいくのを見るのもいやだし、同じことをくり返し生きていくのもいやです。一度しかないからこそ、有意義な人生がおくれるのではないのでしょうか。大事なものを捨ててでも、やりたいことをいつか見つけられるようになります。

## △資料② 生徒のプリント▽

①かぐや姫が、はじめ竹の中から出てきた時と、五人の求婚者に対して出した難問、天に帰った、という所は知っているかぐや姫と同じでした。でも帝が出て来たり、(女官の房子とか) 天人が男っぽかったり(男のように思えた。知っているのは女ばかりだったので) かぐや姫が羽衣を着ると、翁たちのことを忘れたことや、不死の薬が出てきたことが違っているなと思った。それとかぐや姫が月で何か罪をおかして地上におとされたことも知らなかった。

②帝の使者の房子、すごくテキパキした感じでやり手だなと思った。かぐや姫の方が一枚か二枚ぐらい上手だったけれど、すごく好感が持てる人だった。

場面でも房子が出て来た所で、もう少しねばってほしかった。でも帝に報告すると「その気性が多くの人を殺したな」と言うのは、まだかぐや姫に対しての気持ちはまだまだ浅いな、と思うところが感じられる所でした。

③かぐや姫が持っている結婚観、最近やっと結婚しなくても文句を言われなくなってきたのに、この時代で、こんな考えを持っている(作者自身)ことはすごいと思う。それから、帝がかぐや姫をつれて行こうとすると影になつてしまつたり、天人たちが使っている力、羽衣を着ると苦しいことがなくなってしまう所なんか、千年ぐらいい前に書かれた話とは思えない様な不思議さがありました。

話の中のこぼれ話ばい所(これがもととなって、この言葉ができたというところ)も、なっとくさせてしまおうところがあつておもしろかつたです。

この時代から月に人が住んでいる(宇宙人?)という考えは昔からあつたのか、疑問に思います。

④天上人と地上人は、力がある方とない方、心が苦しくなるのがある方とない方、という違いがありました。いろいろな力がある天上人は、かぐや姫と翁達の心の痛みは分からないのではないかな、と思います。

かぐや姫は、翁たちという間、羽衣がなかったの、いろいろな辛い事もあつたと思うけれど、その分、うれしい事も多くあつたと思います。天人は、地上人より優れている点が多いし、辛い気持ちも無いのでいつも幸せだと言えるけれど、地上人は、いつも幸せでない分、うれしい事や楽しいことが、天人よりも多いと思います。かぐや姫は、地上人としていた時が、一番良かったんじゃないかな、と思います。

## 資料③ 生徒のプリント

### 翁（さかきの造）から見た竹取物語

神崎 愛

かぐや姫が月に帰ってからずいぶんたちました。

かぐや姫が去ったばかりのころは涙がかれて血が出るほど嘆きつづけ、周りの者たちが元気づけようと様々な事をしてくれましたが、そのころの私は貸す耳も持っていませんでした。

今の私はかぐや姫の置いていった薬も飲まず、嘆いてばかりいたので病気になるってしまつて床に伏せてしまいました。

今では、かぐや姫のことは、いい思い出として考えられるようになりました。

かぐや姫が私の子どもとなった日は、私がいつものように竹を取りに行つた時でした。一本の光る竹の中に三寸ばかりの大きさのかぐや姫がすわっていたのです。小さくてかわいい子どもだったので「私の子どもとなる人にちがいない」と思つて家につれて帰りました。それが私達の出会いでした。あんなに小さな子が美しい娘になって、私達夫婦の支えとなるとは、その時は少しも思いませんでした。

しかし、三ヶ月ばかりで小さかったかぐや姫は、大きく成長して美しい娘になりました。そのころには私の家は竹の中から出てくる金のおかげで豊かになっていたので、かぐや姫のおひろめの宴会を盛大に開きました。

宴会の後、かぐや姫のうわさを聞きつけた男たちが家の周りをうろつくようになりまし。手紙が来たりしていましたが、かぐや姫は相手にしなかつたので、あきらめて来なくなりました。こんなことでは、誰一人として相手にしなくなつては大変なので心配になりました。けれど、相手にされなくてもあきらめないで来る五人の人達がいました。石

作の皇子、くらもちの皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上磨足というそれ自身分の高い方々でした。

何度も無視されると五人の方々は私に「かぐや姫を嫁にください」と言ってきました。けれど私の娘であつて娘でないかぐや姫をどうして私一人で決めることができましょう。身分が高いということ、いろいろな面で幸せになれるかもしれないとは思つていてもです。そこで私は、「あの五人の中の誰かと結婚してほしいのです。」と言つと、かぐや姫は、「何故結婚しなければいけないのでしょうか。五人のうちの誰かとはいつでも私にはあの方々の愛情がどれほどのものかわかりません。ただ私のうわさを聞いただけで結婚したいと思つているのかもしれないでしょう。どんなにすばらしい人でも愛情がどれほどのものかわかつてからでない後悔するかもしれないでしょう」というのです。

「あの方々の愛情は並々ならないほどのものですよ」と私が言つても、「どれほどのものか見たいという訳でもないのです。けれどあの方々の愛情が皆同じようなら、なおさら選ぶのが難しいでしょう。ですから私が言う物を持つて来てくれた方と結婚しようと思うのです。」その時は何故それほどまでに結婚をしたがらないのかわかりませんでしたので、私はかぐや姫の出した難問を五人の方々々に伝えました。それはとても普通では持つて来られないような品物だったので心が痛みました。けれどかぐや姫は「何が難しいでしょう」というのでしかたがありませんでした。

かぐや姫の望みをかなえようと、五人の方々は長い間かかつて持つて来ようとしていました。そうして石作の皇子や、くらもちの皇子、阿部の右大臣がそれぞれの品物を持つて来ました。私はそれぞれ本物らしいので、かぐや姫のあのような望みをかなえてくれたのでうれしく思つていました。

けれど、三人の方々を持つて来たのはそれぞれがにせ物だったので少しの間でもうれしく思つた私は、打ちのめされるような感じがし



ました。それぞれかぐや姫を幸せにできる人だと信じていたので特にです。

後の二人の方は、大伴の大納言は、さんざんな目にあつたといううわさでその後家に近づきません。石上の中納言は籠から落ちて、それが元で病氣になつたようですが、さすがにかぐや姫も心配になつたのか、文を送つたようですが、病氣が元で亡くなつてしまいました。

かぐや姫は結婚しないですんだので喜んでいたようでした。けれど私は、全員だめだつたのがわかると悲しい気持ちとうれしい気持ちになつてしまいました。

そうして五人の方々が来なくなつてかぐや姫の回りも少し静かになつたころ、かぐや姫のうわさを聞きつけた帝が女官を家によこしました。

おばあさんが対応したのでよくわかりませんが、その女官もかぐや姫と同様に一本すじの通つたような人だつたようで、大変だつたようです。かぐや姫は頑固に会おうとしないと、その女官も会えるまで帰らないというので大変だつたそうです。けれど、かぐや姫が一枚も二枚も上手だつたようで、あきらめて帰つたそうです。しかし相手が帝です。私は帝の氣分を害したのでよくないかと心配で心配でたまりませんでした。考えめぐらしていると、帝から呼ばれてきました。失礼な事があつた後のこともあるので緊張してガチガチになつてしまつたのです。かぐや姫を宮仕えさせたら、私に五位の官位を下さるといふのです。私が貴族になれるのです。とてもうれしくて、家に帰つてから言つと、「宮仕えをして、あなたに官位がさすかつたら死んでしまいます。」とかぐや姫はいいです。位に目がくらんでしまつて、かぐや姫の気持ちを考えなかつたことに気がついてはずかしく思いました。

#### (中略)

そうして午前〇時ごろ家の回りが明るくなつて月の人々が天から下りて来しました。

強氣でいた兵士達は、何か力が働いているのか、思うように戦えませんが、私も天人など引きずりまわしてやるうなどと強氣でいましたが、啞然としてしまふばかりでした。それでもかぐや姫を渡すわけにはいきません。

天人からかぐや姫を返すように言われましたが、「このかぐや姫は私が大切育てた私の子だ。」と言つて返そうとしました。天人は私のことはあきらめたのか、無視して、かぐや姫を表に出て来させ、かぐや姫に月に帰る方がいいです。あれだけ帰りたくないと言つていたかぐや姫もあきらめてしまつたのか、私達に「せめて見送つてください」と言います。

でもどうして見送ることができません。私が行かないでくださいと泣き伏してもかぐや姫はとどまることはできないようでした。

けれどかぐや姫は私達に泣く泣く文を書いて別れを上げます。その時帝にも文を書いたらしく、頭中将に文を渡していたようです。

泣きながらいたかぐや姫でしたが、天人から羽衣をかけられると、今まであんなに悲しそつたのが、何もなかつたことのように、私に目もくれず帰つていきました。

あの子は本当に私達の事など忘れてしまつたのでしようか。文には月を見て思い出して下さいと書いてあつたのに。そんな風に考える心が張り裂けそうになります。かぐや姫が月に帰るときにひと思いに記憶をなくしてくれたらどんなに良かったか、とも思つていました。でもかぐや姫がいたころの私達は毎日が幸せで、お金はありましたがそれは別の豊かさがあつたので、忘れてしまうのは悲しい事のようにも思います。私達が忘れてしまつと、地上にいたところのかぐや姫はなくなつてしまふのです。

そう思えるようになったので、私はかぐや姫の事は大切な思い出として持つておけるようになりました。